

性感染症（STI）とはどんな病気でしょうか？

Q 1：性感染症とは何を指すのでしょうか？

A 1：原因となる菌やウイルスなどが、性行為によって、人から人へと感染する病気をいいます。

Q 2：性感染症は、どんな人が罹り、どんな種類があるのですか？また、どんな行為で感染が起こるのですか？

A 2：感染する懸念は性行為をする人すべてにあります。性感染症には淋菌感染症、クラミジア感染症、性器ヘルペス、梅毒、尖圭コンジローマ、HIV 感染症(AIDS：エイズ) などがあります。

膣性交だけでなく、下記の(1)～(4)は口腔性交（オーラルセックス）でも感染することがあります。オーラルセックスとは口又は舌を使って相手の性器を刺激する行為です。

これらの病気の概要を説明します。

(1) 淋菌感染症：淋菌という菌が引き起こす病気です。男性では尿道炎（尿の出始めの痛み、陰茎の尿道口からの黄色で粘り膿）、女性では子宮頸管炎（帯下増、約半数で無症状）が起こります。潜伏期間（感染機会から症状が出るまで）は2～7 日ですが、女性では、自覚症状がないまま、骨盤腹膜炎で発症し、強い下腹部痛をきたすことがあります。更に上腹部まで感染が進展すると肝臓周囲炎を起こし、激しい上腹部痛をきたします。治療には抗菌薬が用いられ、単回投与（注射）で尿道炎や子宮頸管炎は治る場合が多いのですが、腹膜炎になると入院治療が必要となる場合があります。

(2) クラミジア感染症：クラミジア・トラコマティスという菌が引き起こす病気です。淋菌感染症と同様の感染部位ですが、潜伏期間は1～3 週間ですが、男性の尿道炎でも症状は弱く、半数が気付かないまま保菌しています。より深部の精巣上体炎（陰嚢内容が腫れて痛くなる）で発症することもあります。女性でも7～8 割が子宮頸管炎の状態では気付かず、腹膜炎症状で発症することもあります。症状がないままに卵管癒着等が起こり不妊症の原因となることもあります。治療は深部感染に至っていないければ、抗菌薬の内服で治すことができますが、精巣上体炎や腹膜炎では、かなり長期の投薬が必要です。

(3) ヘルペス感染症：単純ヘルペスウイルスは性器のほか、口唇や口腔内に水疱・潰瘍をきたし、この感染症は痛みを伴い、治っても再発を繰り返します。症状がない時でもウイルスの排泄は続いているといわれ、膣性交、オーラルセックスでこのウイルスが性器に感染し、2～5日の潜伏期を経て性器ヘルペスとしては男性では亀頭や包皮に、女性では陰唇を中心に水疱・潰瘍・痛みをもたらします。治療には抗ウイルス薬の投与が行われます。

(4) 梅毒：性器や口唇・口腔内に梅毒病変ができます。梅毒トレポネーマという菌が膣性交やオーラルセックスによってうつり、病変を作ります。性行為後約3週間の潜伏期を経て、男性性器では陰茎亀頭部やその上の包皮に、女性性器では陰唇部に、初期硬結という痛みのない硬い病変ができ、次第に崩れ、硬性下疳と呼ばれるやはり無痛の潰瘍となります。

この病変は自然に吸収され良くなりますが、病気が治ったわけではなく、そのあと全身感染となり、約3か月後にはⅡ期病変と呼ばれる手のひら・足の裏を中心に乾いた発疹が現れ、進んでいきます。治療には抗菌薬が使われます。

(5) 尖圭コンジローマ：性器にできるイボ（疣）で、ヒト乳頭腫ウイルス(HPV)感染により性交渉で伝播します。低リスク型HPVで起こるのが尖圭コンジローマです。この疾患は皮膚の疣の治療と同様、液体チツソによる凍結療法や手術による切除、あるいはこの疾患に適応をもつ特殊なクリーム塗布で治療できます。一方で高リスク型HPV感染もあり、その感染が起こると10数年を経て女性では子宮頸癌が発生することがあり、性感染症の中で癌につながるものとして注目されています。予防ワクチンが自費診療で接種できます。

(6) HIV感染症(AIDS；エイズ)：HIVとはヒト後天性免疫不全症候群ウイルスの略で、性交渉（膣性交または肛門性交）で伝播します。HIV感染症に罹ると数週間後にインフルエンザに似た高熱などの症状がみられることがありますが、その後は無症状キャリア期が平均10年間続き、やがてエイズに至ります。エイズになると、様々な微生物に感染しやすくなり、無治療で放っておくと生命が危うくなります。近年、抗HIV療法として、数種類の薬剤を組み合わせ服用を続ける治療法が進展し、早く病気が見つかれば、命を落とすこ

とはほとんどなくなりました。しかし、いったん薬を開始したら一生、服用を続ける必要があります。

Q 3 : 予防法はあるのですか？

A 3 : あります。性行為をしないこともそのひとつです。性行為するのであれば、コンドームを最初から着用してすることが予防法です。ただし、膣性交だけでなく、口腔性交でも感染することがあります。（Q & A : 9 を参照）

Q 4 : Q & A 2 および 3 で出てきたオーラルセックス（口腔性交）とはどんな行為ですか。

A 4 : 口又は舌を使って相手の性器を刺激する行為です。

Q 5 : オーラルセックス（口腔性交）で性感染症に感染したらどうなりますか。

A 5 : オーラルセックスにより性感染症に感染することには2 つの意味があります。ひとつは、「性器にいる病原体がオーラルセックスにより口腔内に感染を起こす」という意味、もうひとつは「口腔内にいる病原体が性器に感染を起こす」ということです。どちらの場合も、自覚症状がある場合とない場合とがあります。

特にオーラルセックスで、性器から口腔に感染した場合は無症状のことが多いので、自分が感染していることに気付かないままに、更に別の性交渉相手にオーラルセックスを介して性器に感染させてしまうことがあります。

Q 6 : オーラルセックス（口腔性交）による性感染症はどのくらいあるのですか。

A 6 : 性交渉の際にオーラルセックスを行うカップルは特に若い世代に多く、調査の結果では7割以上で行われており、その際にコンドームを使用するのは2割程度という調査報告があります。

また、性器に淋菌をもっている人の10~30%、クラミジアをもっている人の10~20%で、口腔内にもこれらの菌が認められると報告されています。このため、オーラルセックスにより性感染症が拡がることが懸念されています。

Q7：オーラルセックス（口腔性交）による性感染症の心配があった場合はどこに受診すればよいですか。

A7：性感染症は一般的に男性では泌尿器科又は皮膚科、女性では産婦人科で診察されており、また、口腔内の性感染症に関しては耳鼻科で診察している場合もあります。予め電話してから受診することをお勧めします。

Q8：オーラルセックス（口腔性交）による性感染症の検査はどんな検査をするのですか。

A8：最近では、男性なら初尿と咽頭擦過検体の両方を、女性なら子宮頸管擦過検体と咽頭擦過検体の両方を検査することが多くなってきています。咽頭擦過検体の代わりに咽頭うがい液で口腔内に菌がないかどうかを調べるこの方が菌を見つけやすいという報告もあります。

Q9：オーラルセックス（口腔性交）で性感染症に感染しないためにはどうすればよいですか、予防方法はありますか。

A9：男性用コンドームを陰茎に装着してすることや、女性の性器にラップ等を使用することで感染のリスクを低くすることができます。ヘルペス感染症のように皮膚と皮膚の接触でも感染するものについては、コンドームやラップ等で防ぎきれない場合もありますので、性器や口腔周囲に異変を感じる時は、オーラルセックス（口腔性交）を含めた性行為を差し控え、早期に医療機関を受診することが望まれます。

Q10：キスだけでも性感染症はうつりますか。

A10：仮にパートナーが口腔内に淋菌やクラミジアを有していても、通常のキス程度であれば感染が成立するほどの暴露がないため、感染リスクは極めて低いと言えます。ただし、ヘルペス感染症のように皮膚と皮膚の接触でも伝播するものについては、キスする際に皮膚が接触することで感染する可能性があります。

Q11：性感染症について相談できる機関はありますか。

A11：性感染症については、全国の保健所で相談することができます。「性感染症について相談したい」旨を伝えれば担当者につながります。保健所の連絡先は下記URL で確認してください。

<http://www.phcd.jp/HCl list/HCl list-top.html>

また、厚生労働省でも性感染症も含めた感染症に関する相談電話を開設しております。電話番号は03(5299)3306（2013年4月1日から電話番号が変更することがあります。）受付時間は9時～17時（土日祝日及び年末年始を除く）です。

【厚生労働省の性感染症に関するホームページ】

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/seikansenshou/

2012年の厚生労働省の性感染症予防に関する主な動き

- ・2012年1月19日新・性感染症予防指針官報掲載
- ・2012年3月16日パートナー健診のポスターをホームページに掲載
- ・2012年11月26日オーラルセックスについての予防啓発ポスターをホームページに掲載
- ・2012年11月26日オーラルセックスについてのQ&Aをホームページに掲載

（執筆者：神戸大学医学部附属病院 泌尿器科 荒川創一）

（参照：厚生労働省の性感染症に関するホームページ）